

意味がわかると
ゾツとする話

— 松本うみ



目次 もくじ

第一章

—— あなたの周りは大丈夫ですか？

005

タクシー／身代金／終電／聞いた話／夏休みの日記
愛を込めて／メッセージ／頼りになる／すれ違い／記念日
訪問販売／透明人間／残したもの

第二章

—— あなたは知っていますか？

067

大切なもの／几帳面／かくれんぼ／ベランダ／テスト
録音／コーヒー／あいさつ／洞窟／油断大敵／占い／演奏

第三章

—— まだ間に合いますか？

119

とほほ／救世主／道案内／ルールを守ろう／シャボン玉
書き置き／暗闇の宅配便／選択肢／廃屋の中で
優しくしたい

第一章

あなたの周りは大丈夫ですか？



私は不動産の営業マン。

まだ若手なので
朝は早く夜は遅くまで働いている

今日も遅くまで
残業をした。



さすがに疲れたので

今日はタクシイで
帰ることにした。

この状態で
電車で揺られる気分には
とてもなれなかつたからだ。



運転手の返答を
聞くと
私は疲れから

そのまま車内で
眠ってしまった。



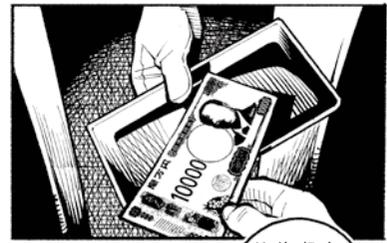
……すみ、

お客様さま、

着きましたよ



私が見ついたのは、



気がつかって
起きるまで
待ってくれたん
だな

夜遅いのに
申し訳ない



かしこまりました



家まで

自宅のドアに
手をかけてからだった。



主人公は運転手に「家まで」としか伝えていない。
それなのに、正確に主人公の家まで送り届ける運転
手は何者だろうか？
親切なように見せかけて、よく考えると不気味なタク
シーだ。

「いつてきまーす！」

家を元気に飛び出す小学一年生の息子を笑顔で見送る。陽一よういちは私の宝だ。

私が息子とふたりで暮らし始めてから、もうすぐ一年。

これまでの人生、紆余曲折うようきよくせつはあったが、今こうして二人で幸せに暮らせていることが何よりも嬉しい。

もちろん仕事をしながら男手一つで子供を育てるのは大変だった。

だが息子のためならどんなにつらく、苦しいことでも頑張つてこられた。

さて、今日も大きな仕事が残っている。

私の経営手腕けいぎょうしゅけんが問われる、大きなプロジェクトの初日だ。

玄関げんかんでネクタイを締め、革靴を履いていたとき、スマホに一件の電話がかかってきた。

知らない番号だったが、私はとりあえず出てみることにした。

「鈴木すずきさんですね？」

「ああ、そうだが……」

電話の相手は機械で加工した音声で話しているようだ。

「落ちついて聞いてくださいね。今さっき、陽一くんをお預かりしました。この子の安全を保障してほしいなら、二千万円を用意してください」

「なんだと……!!」

私は突然のことで理解が追いつかなかった。

だが、一瞬音声が切り替わり、電話口の向こうから息子の無邪気で楽しげな声が聞こえてきた。どうやらイタズラではないらしい。

電話の相手は続けて指定の口座や取引の方法を伝え、一方的に電話を切った。

息子を取り戻さなければ。

金など、どうにでもなる。息子のためなら、全財産を投げうってもいい。

私は大事なプロジェクトのことなどは放つて、急いで銀行へ向かった。

そして電話で指定された通りに振込を行い、犯人からの連絡を待った。何も手につかずウロウロして一時間、電話が鳴った。朝かかってきた番号だ。

「もしもし、確かに二千万円をいただきました。ありがとうございます」

「ああ、金は払った、これで息子は返してくれるんだろうな」

「いいや、息子の安全は保障するが、返すとは言っていない」

「なんだと……！」

ここで相手は音声の加工を解除したようで、肉声でこう言ってきた。

「安心して。このお金は、この子のためにありがたく使わせてもらおうわ」

その声を聞き、私は気がついた。

やられた。いや、気づくのが遅すぎた。

あの女だ。

私はガツクリと膝を折り、その場に倒れこんだ。



誘拐犯に騙されて、お金だけを払い子どもを奪われてしまったお父さん。しかし、お金だけが目的なら子どもは返すのが自然だろう。そうしなかったのは、この犯人の目的が子ども自身だから。息子の名前や父親の経済状況を把握していることから、犯人はお父さんをよく知っている人物だと予想できる。

実は誘拐犯の正体は陽一くんのお母さんだ。過去に奪われた息子を取り返すために、一年かけて準備をして、養育費つきで息子を取り戻したのだ。

何やら複雑な事情がありそうだが、はたしてどちらの親に育てられるのが陽一くんにとって幸せなのだろうか……

月に一度の会社の飲み会が終わった。

もう十二時になりそうだ。今日もすっかり遅くなってしまった。

二次会どころか三次会まで続くこの恒例行事こうれいぎやうじにも、もう慣れたけど、やっぱり終わった後は疲れてしまう。明日が休みだからいいけど、先輩たち相手に気をつかうのも楽じゃない。

私は頭に二日酔いふつかよの予兆を感じながら、足早に駅へと走った。

駅の電光掲示板を見ると、二分後には終電しゅうでんの時間。

これを逃すと面倒なので、私は急いで階段を駆け上がり、その電車に飛び乗った。

私が乗ると同時に電車の扉は閉まった。危なかったあ。

私は息を整えながら、空いている席を探す。

終電しゅうでんだから混んでいるかと思っただけれど、それほど人は多くない。

私はゆっくりできそうな端っこの座席に座る。

腰を下ろした途端、走った疲れと酔いでウトウトしてきた。

眠い。最寄り駅もよまでそう遠くないけど、少し寝ちゃおうかな。

いやダメダメ、終電しゅうでんなんだから寝過ぎしたら大変なことになる、頑張っておかないと。

でもやっぱり眠い……

しばらくして、肩を叩かれていることに気づいて目が覚めた。

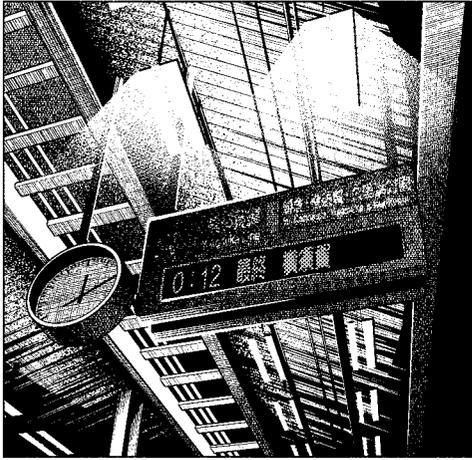
どうやら隣の男性にもたれて寝てしまっていたようだ。

「す、すみません！」

「大丈夫ですよ。でも降りなくていいの？」

そう言われて窓から外を見ると、電車はいつの間にか私の最寄り駅もよについていた。出入口の扉はもう開いている。

「あ、ありがとうございます！」



彼女が電車を降りたとき、車内はガラガラだったはず。つまり、空いている席はたくさんあったということ。それにも関わらず、端っこで眠る彼女の隣に座っていたこの男性には、いったいどんな意図があったのだろうか？

それに降車する駅で起こしてくれた行動は一見親切に見えるが、彼女が降りる駅を知っていたこともよく考えるとおかしい。さらには彼女が降りた後にわざわざ車両を変えようとしているところにも違和感が残る。もしかしたらターゲットは彼女一人だけではないのかも……

私はハツとして、急いでガラガラの車内から飛び出した。
ホームに降りた私はすぐ振り返り、起こしてくれた男性にべこりと頭を下げた。
男性はにこりと笑うと、座席を立ち、違う車両へと歩いていった。

ふう。親切な人がいて助かった。
せっかく終電しゅうでんに乗れたのに、危うく寝過ねごすところだった。危なかったあ。

ちよつとちよつと、そのお二人さん、少し話を聞いていきませんか。

え？ 私のような怪しいピエロとはお話ししないって？

そこをなんとか、面白いお話をご用意しております。

ええ、聞いた話ではありますが、ちょうどあなたたちのような小学生二人組のお話でございます。

その子たちは怖いお話が大好きでございましてね、いろんな本を読んだりテレビを見たりして、楽しんでいたんです。

でもその二人は、だんだんとそういうお話だけでは満足できなくなっていました。

そこで、肝試きもだめしをしようという話になったんです。

内容はカンタン。

夜の小学校に入りこみ、校舎の中を一周できたら成功。

そう決めた二人は家を抜け出して、意気揚々と夜の学校へと向かいました。

校門を飛び越えて、昇降口しょうこうぐちから中へ。

ビクビクしながらも、一階、二階、三階と廊下ろうかを歩いていったんですね。

そこまでは何も起きず順調だったのですが、四階でおかしなことが起こりました。

なんと、音楽室の方から、ピアノの音が聞こえてくるのです。

ジャジャジャジャーン……

その音を聞いた二人は、顔を見合わせました。

でも、こんなことで怖気おじけづいてはられません。

二人は勇気を出して、音楽室の扉を開け、中を見てみたんです。

すると中にはピエロの格好をしたとても大きな男の人がいて、ピアノを弾いていたそうです。

そのピエロは二人を見つけて言いました。

「見たな」

とゆっくり一言だけ。

その後、その二人の行方は分かっていないらしいです。

もちろんその音楽室であった出来事も、その二人以外はだれも知らないままなんですって。
怖いですよ。



夜の小学校に忍び込んだ二人の小学生は、音楽室でピアノを弾いているピエロを見かけて、それから行方がわかっていないらしい。

ということは、この話を知っている当事者は一人、ピアノを弾いていたピエロだけのはず。

いまこの話をしている人も怪しげなピエロの格好をしているみたいだけど、話を聞かされている二人の小学生はこのあとどうなるだろう。

7月24日

明日から夏休み。ワクワクします。

けど宿題もいっぱいあります。この日記もそうです。

夏休み中の出来事と、アサガオのアサちゃんの観察日記をつけていきます。
毎日暑いけどがんばります。

7月25日

夏休み初日。今日は宿題のドリルをいっぱいやりました。

半分くらい進んだので、この調子で早めに終わらせたいです。

アサちゃんは元気に育っています。

昨日からもう一つ花を育て始めたので、それも一緒に日記に書くことにしました。

これは昨日アサちゃんの鉢はちを持ち帰っているとき、近所のお兄さんがくれたものです。
名前はメロちゃんにしました。ピンク色の花が咲くらしいです。

7月26日

夏休み二日目。今日は学校のプールに行きました。

授業の時とは違ってずっと自由に遊んでよかったです、とても楽しかったです。

アサちゃんはツルが伸びて、棒にいっぱい巻き付いています。

メロちゃんも葉っぱが大きくなりました。

7月30日

今日は遊園地から帰ってきました。昨日出発して、一泊しました。

キヤラクターに会えて嬉うれしかったです。

あと鉄砲てつぱうで狙あい撃うつアトラクションが面白かったです。

アサちゃんもメロちゃんもたぶん元気です。また明日から水やりがんばります。

8月5日

今日は花火大会に行きました。カラフルで派手はでできれいでした。でも人が多すぎて、暑かったし疲れました。アサちゃんはつぼみがいくつかできています。たぶんもうすぐ花が咲くと思います。メロちゃんもだいぶ大きくなりました。

8月10日

今日は子ども会でボウリングに行きました。前からゲームではやっていいたから上手にできると思っていたけど、実際にやってみると難しかったです。

あと、アサちゃんの花が一つ開きました。メロちゃんの方もつぼみができているので、そろそろ花が咲きそうです。どんな花が咲くのか楽しみです。

8月13日

メロちゃんの花が咲きました

薄いピンク色で、思っていたよりは地味な感じだけど、綺麗きれいな花です。何となく香ばしいような匂いがあります。

アサちゃんは、毎日花を咲かせるようになりました。

8月15日

明日からおばあちゃんの家に行きます。だから今日のうちに水やりをして日記をつけようとしていたら、お父さんにメロちゃんを注意されました。

メロちゃんは本当はケシという名前なまで、蜜みつがとっても美味しい植物だそうです。

でもその分育てるのが難しいから、子どもは育てちゃダメだと言われました。残念だったけどお父さんが代わりに育ててくれるというので、仕方なくあげることにしました。

アサちゃんは種がいつばいできているので回収しています。

種を集めるのは楽しいです。

8月21日

今日は家族でバーベキューをしました。

お肉を焼いたり、貝を焼いたりしました。マッシュマロも焼きました。美味しかったです。

8月24日

夏休み最終日。

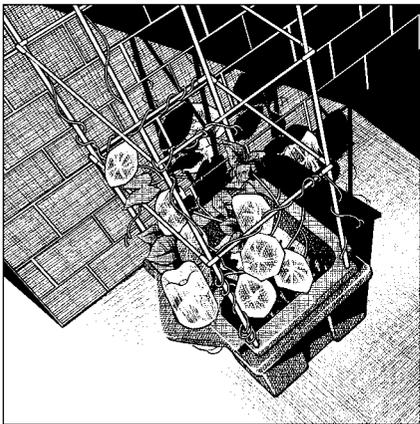
今日はやっていなかった自由研究とドリルを終わらせて、読書感想文を書きました。

日記も結構サボっちゃったけど、最終日までちゃんと書きました。

アサちゃんはもう花も全部しぼんで、あとは種を採るだけです。

お父さんにきいたらメロちゃんの方も種ができてるみたいで、これから増やしていくそうです。

明日から学校なのは嫌だけど、がんばりたいと思います。



特におかしなことはない夏休みの日記のようだけど、この子が育てていたメロちゃんことケシという植物は、実は育ててはいけないもの。というのも、このケシはマダカ麻薬の材料にもなるような植物で、勝手に育てるのは法律で禁止されている。だから咲いた花を見てケシだということに気づいたお父さんも、それを育ててはいけないと注意したようだ。

ところでそんなものを子供にあげた近所のお兄さんは、一体何が目的だったのだろう？

さらにはケシにいち早く気づいた上、それを没収した後に自分で育てて量産しようとしているお父さんは大丈夫だろうか？

「佐藤さん、これどうぞ」

僕が資料作りで頭を悩ませていると、その声をかけてきた人がいた。パソコンから目を離して顔を上げる。

同僚の田中さんだ。どうやらお茶を汲んでくれたようだ。

「ああ、ありがとうございます。いつもすみません」

田中さんはいつもお茶を淹れてくれたりお菓子をくれたりする。それに、かなりの美人だ。「いいんですよ。佐藤さん頑張ってるみたいだし。それにいつも美味しそうに飲んでくれるじゃないですか。だから私も嬉しいんです。どんどん飲んでくださいね」

彼女はそう言い、お茶を飲む僕のことを笑顔で眺めていた。

「なあ佐藤、お前が羨ましいよ」

「ん、なにが？」

喫煙所でタバコ休憩をしていると、同期のスギが話しかけてきた。

「田中さんだよ。お前さつきもお茶もらったただろ」

「ああ、そういえばもらったよ」

「いいよなあ、なんでお前ばかり。俺なんてそんなこと一度もしてもらったことないのに」

「そうなの？ てつきり皆に配ってるのかと……」

「お前だけだよ。気に入られてるんだろ。羨ましいよ」

「気に入られてるって……でも田中さん結婚指輪してたし、そんなことないって」

「どうだかな。俺らと同じくらいの歳に見えるし、全然おかしくないと思うけどね」

そういう風に言われてみると、確かに田中さんはいつも笑顔で話しかけてくれるし、手作りのお菓子をくれたことなんかもあった。

ただの職場の付き合いだと思っただけど、一回意識すると全部の行動がそういう風に見える。てくる。

スギとの話のあと、僕は自分の席でぼんやりとそんなことを考えていた。

田中さん。ふと田中さんの席の方に目をやると、田中さんもこちらを見て、ニコッと微笑
んでくれた。僕はお腹がキュツとした。

そんな田中さんが、急に会社に来なくなった。

上司からは退職したとしか聞かされず、理由は分からない。突然のことだった。

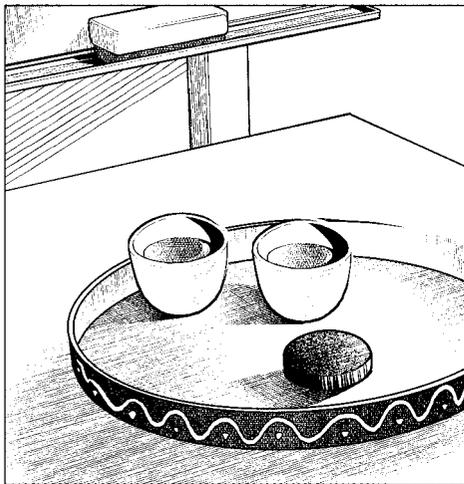
だがある日のネットニュースに田中さんの記事が出ていたことで、僕はその理由を知るこ
とになる。

田中さんは夫殺しの犯人として逮捕されていたのだ。

僕は驚いて、記事を詳しく読む。

その記事にはこう書かれていた。

『——田中容疑者は飲み物に少しずつ毒物を混ぜ、夫を殺害した疑い。容疑者は「愛情表現
の一つとしてお茶やお菓子に毒を混ぜていた。毒物を混ぜているとき、そしてそれを食べて
もらっているときに幸せを感じていた。殺す気はなかった」と述べている。警察は証拠品等
の捜査を進めると共に、容疑者の精神鑑定も行う予定だ——』



佐藤だけに優しくしていた田中さん。

その田中さんは、愛情表現として食べ物や飲み物に
毒を混ぜるような人物だった。

「私のあげた食べ物や飲み物で苦しんでいる姿が見た
い。私は毒を混ぜているのに、そんなことは知らず
に感謝をしている姿が見たい」

田中さんはそんな風に思っていて、とうとう夫を死に
至らしめてしまったようだ。そんな田中さんからよく
お茶を淹れてもらっていた佐藤の今後は……

最近の困りごと。何者かからの、陰湿いんしつな嫌がらせを受けていること。

その内容は、郵便受けにいろいろな物を入れられるというものだ。

私の家は古いアパートだから、郵便受けも玄関げんかんのドアについているタイプで、外側の小さな口から入れられたものを内側の大きい口で取り出すという少し古い形のもの。

今まで入れられてきたものは、例えば牛乳パック。

それもなぜか、洗って切って乾かしたやつ。たぶんスーパーとかにある回収ボックスに入る前の状態って言うイメージしやすいかな。それが何枚も入れられていた。

洗っているとはいえ普通にゴミだから、処分が面倒だった。

あとは名刺めいし。

誰のものかも分からない、色んな人の名前と会社名が書かれた名刺めいしが、百枚くらい突っ込まれていたこともあった。

社会人になると名刺めいしがどんどん溜たままっていくって聞いたことがあるけど、その処理に人々の郵便受けを使うことなんてある？ そんなの社会人失格じゃん。

個人情報なわけだし、一応シュレッダーしてから捨てたけど、これも処理が面倒だった。

極めつけは小銭きわ。

郵便受けを内側から開けたら、大量の十円玉や一円玉が散らばったことがある。

その枚数の多いこと。これは一枚一枚拾うのがとても面倒だった。

ちなみにそんなお金を使うのもなんだか気持ちが悪いです、そのまま袋に入れて今も部屋に置いてある。一応お金ではあるし、ゴミ箱に捨てるわけにもいかないしね。

そんな感じの嫌がらせ。

いたずらレベルと叫びたらそれまでだけど、こうも続くとめんどくさいし気持ち悪い。



古いアパートによくある扉に直接ついている郵便受けに、様々なものを入れられる嫌がらせ。

よく考えてみると、このタイプの郵便受けは、外側の口は新聞が通るぐらいの細い隙間だ。そんなところを丸くて大きなリングが通るわけがない。

つまり、リングを郵便受けの中に入れるのは、内側からしかできないということ。

「お前の家にはいつでも入れるぞ」

そんなメッセージが込められているのかも……

大学のすぐそばにあるアパートだから、ここが私の家だと知っている人は結構いると思う。だから、もしかしたら大学内の誰かの仕業しわざかもしれない。

大学のサークルでも浮いているといえれば浮いているし、割わりとものごとをハッキリと言うタイプだから、友達が少ないのもそうなんだけど、だとしてもこんなことをされるいわれはない。いちいち処理が面倒なものばかり入れられるし、さすがに次になにかあったら警察に相談しようと思う。

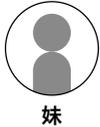
そう思っていた矢先やさき、今日も郵便受けへの嫌がらせは届いていた。
丸くて赤い、大きなリング。

郵便受けを開けると同時に、玄関げんかんへと転がり落ちてきた。

決めた、警察に相談しよう。

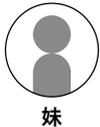
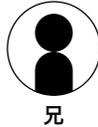
私は転がったリングをそのままに、カバンの中からスマホを取り出した。

ガチ相談じゃん
 おけ
 今日の夜にはそっち行けるから、とりあえずコンセントとか、エアコンの中とか、何か変な物が入っていないか軽く調べておいて



了解
 ありがとう！
 忙しいのにごめんね；

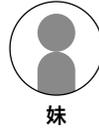
忙しすぎて八時間しか寝れてない……
 睡眠時間削って行くわ



忙しくなくてよかった！ 待ってる！

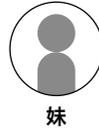
最悪、なんか見つかった
 本棚の隙間にあった……
 たぶん盗聴器とうちようきだよな？
 これどうしよう

まじか
 とりあえず分解しておくか、難しかったら布団とかにくるんで隅っこの方に置いとこう



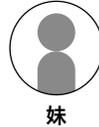
ヒマ？
 いま

いいえ



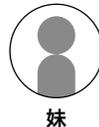
ヒマでしょ
 相談があります！

なに？



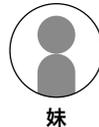
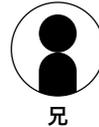
なんか盗撮とうきまつされてるかもで

盗撮とうきまつ？
 くわしく



部屋で誰かに見られてる気がして

まじか



もちろん気のせいかもしれないけど……
 お兄ちゃん機械とか詳しいでしょ？
 一回調べてくれないかなって



妹

こっちまで来てくれて疲れたよね？
犯人まで捕まえてくれたわけだし

まあ普段から体力蓄えてるから大丈夫
何事もなくてなにより！



兄



妹

でもなんで犯人が来るって分かったの？

あー、盗撮とか盗聴するやつって、仕
掛けた機械に異常があったときは絶対
点検か回収に来るからね



兄



妹

盗撮犯ってそういう心理なんだ！

そうそう
だから昨日回収しといたのが効いたっ
てわけ
まさかその日のうちに来るとは思ってな
かったけど



兄



妹

やっぱりたまに頼りになるね！
相談して良かった～



妹

早く来てほしい

おみや
今大宮行き乗ったとこ
もしかしたら明日とかには犯人も分
かるかも
一応部屋番号とか送っというて



兄



妹

ほんと？
待ってるからね

9/19 (金)



妹

昨日はありがとうね！ 犯人まで捕まえ
てくれて！

ほいほい
もう心配とか感じない？



兄



妹

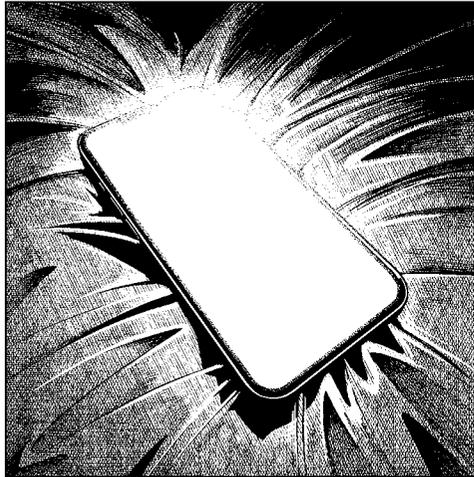
うん！
ちゃんとぐっすり寝れたよb

そりゃ良かった
俺もぐっすりだった



兄

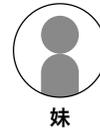
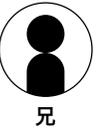
俺のかわいい妹だ。大事がなくて良かった。



妹からの相談に乗り、盗撮犯の確保までしてしまう頼りになる兄。その道に詳しいのは何故かという、彼自身も盗撮をしたことがあるから。同じ盗撮犯同士考え方が分かっているわけで、以前自分は逃げられたとも言っている。妹を守る理由だけは純粋な気持ちであってほしいものだが……

俺はスタンプをタップして、スマホを置いた。
 そう、盗撮や盗聴をするような犯人の思考はよく分かっている。
 だからそれを利用して、焦って現場に忍び込もうとした犯人を待ち伏せして、そこを捕ま
 えればいいだけだ。
 以前の俺はなんとか逃げられたけど、今回の奴は相手が悪かったな。

普段から頼りになるけどな
 一人暮らし始めたばっかなんだから色々気をつけるよ



うん！
 なんかあったらすぐ呼ぶ！
 今度焼肉おごるね

寿司でよろしく



日が落ちて薄暗うすぐらくなった道を、僕は一人で歩いていた。さつきまで友達の家遊びに行っていて、その帰りだ。クラスで大流行中のゲームでバトルや交換するのに夢中になっていたら、すっかり遅くなってしまった。

初めて遊びに来た家だったので、当然帰日も慣なれない道だ。

来たときの記憶を頼りに進んでいると、一本のまっすぐな道に差しかかった。

しばらく曲がり角や家への入口などもない、住宅地の中のまっすぐな道。

両隣はとんでもなく大きな家なのか、会社なのか、立派な塀へいが続いている。

向こうから女の人が一人歩いてくるぐらいで、人通りも少ない。

来たときにこんな道を通ったかはよく覚えていないけど、でも一本道ということはたぶん通ったんだと思う。僕はその道を進んだ。

途中、スマホに目を落として時間を確認する。

学年があがってから、同級生の家に遊びに行くことも増えたし、子供だけで遊びにいったり塾じゅくにいったりするようになったからと、お母さんに持たされている子供用のやつだ。

使えるアプリに制限せいげんがなきゃ最高なんだけど、しょうがない。

あ、まずい！ もう門限もんげんギリギリだ！

僕は急いで走り出し、誰もいない一本道を駆け抜けた。

翌日、僕はまた同じ友達の家遊びに行った。今日もゲームでバトルをするためだ。

またしても暗くなったその帰り道、昨日と同じ一本道に差し掛かっていた。

昨日と同様、向こうから女の人が一人歩いてくるぐらいの人通りの少ない道。

だけど、今日は自信を持って選ぶことができた。昨日のことはさすがに忘れないからね。

スマホで時間を確認すると、今日もギリギリだ。僕は誰もいない一本道を走り出した。

その翌日、僕はすっかり仲良くなった友達の家にもまた遊びに行っていた。

特に何をするわけでもなく、なんとなく楽しいんだ。

あつという間に帰る時間になり、僕は例の一本道を通っていた。

相変わらず女の人が向こうから一人歩いてくるぐらいの、人通りの少ない道だ。

ここに差し加かったときに時刻を確認するのがもはや癖くせになっていた僕は、スマホを取り出して時間を確認した。

その何気ない瞬間しひかんに、僕はふとあることに気がついた。

そういえばあの女の人、見たことあるような……

そうだ、昨日の帰りにもこの道を歩いていた人だ。

顔をよく見たわけではないけど、たぶん間違いない。あれ、一昨日もいたっけ……

僕はその女の人に挨拶でもしようかと思ひ、顔を上げた。

ところが、前方に見えていたはずのその女性はいなくなっていた。

あれ、別にすれ違ったわけじゃないはずだけどな。

そのとき僕は、さらに気づいたことがあった。

昨日も一昨日も、その女の人とすれ違った記憶がなかったんだ。

向こうから歩いてくるのは確かに見たはずなのに。

誰もいない周りを見渡してから少し考えて、僕は怖くなって走り出した。だって、その道は曲がり角はおろか、住宅への入口もない、塀へいだけが続く一本道だったのだから。



向こうから歩いてくる女性が突然消える——普通に考えたら道を曲がったか、どこかの家に入ったかと考えられるが、この道にはそんなものはないらしい。ということは、女性は彼の視界の外にいただけで、案外近くにいるのかもしれない。例えば電柱でんちゅうの上とか、彼のびったり背後とか……

ブルッ。

スマホが一瞬震えて、カレンダーアプリの通知バナーが表示される。

ああ、明日は交際記念日か。

忘れてたらずいから、普段は使わないこのアプリに予定をいれておいたんだった。

私は過去の自分からのリマインドに感謝して、予定を削除する。

今日はそれほど忙しくもないし、仕事の帰り道に百貨店に立ち寄る時間もあるだろう。迷いつつもプレゼントを買う。

これならあいつも喜んでくれるだろうな。

小さなリボンがかけられた小さな箱を、そっとカバンの奥にしまった。

私は一仕事終えた気持ちで、妻の待つ自宅へ帰った。

翌朝、いつものように妻に起こされて目が覚める。

何やらニコニコしている妻を横目に、妻が作ってくれた朝食を食べる。

朝食のメニューはいつもと同じ、ごはん味噌汁にお漬物。今日の魚は鯖だ。

結婚してもう十数年。

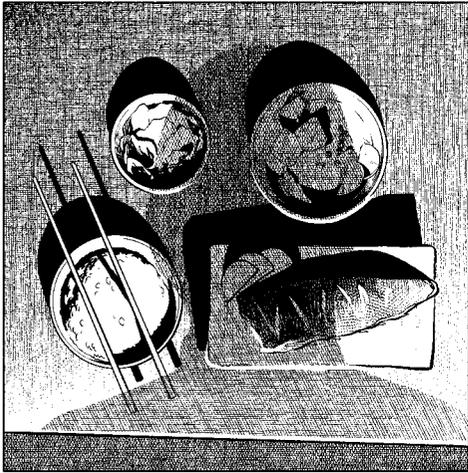
いつ飲んでも妻の作る味噌汁はうまい。

今日みたいにちよっと濃いときもあるけれど、味の感想なんて野暮なことは言わない。

カバンに昨日買ったプレゼントが入っていることを確認し、家を出る。

今日はなんだか頑張れそうだ。

でも、なんか腹が痛くなってきたな。



この記念日というのは妻のものではなくて、浮気相手とのもの。

結婚、記念日ではなく交際、記念日と言っているし、プレゼントを妻に渡さずにカバンにしまったままにいることからそれは明らかだろう。

ただし今回は妻もそれに気づいていたのかもしれない。いつもよりちょっと濃い味噌汁、家を出てからの腹痛。これはただの偶然で、決して妻からの制裁ではないことを祈りたい。

ここは都心から少しだけ離れた、閑静な住宅街。都内の大企業の社長や役員、いわゆるエリート層が家を構える地域として人気を博しているエリアだ。

時刻は十六時。よし、もう一軒は行けそうだな。

私は時計を確認してから、どこにアタックしようかと、手ごろな家を探した。

私は住宅設備の訪問販売員をしている。

ちょっとした家電やインテリアなんかを売るのが仕事だ。

このご時世、訪問販売で物を売るというのも楽な仕事ではないのだが、この辺りの家ではそれも別。高収入のエリート達に人気だけあって、ここらの家はみなある程度広い。当然お金にも余裕がある家庭ばかりだから、ウチの商材を売り込むにはうってつけというわけだ。

よし、あそこにしよう。

数分ほど歩いた私は、一軒の家に目星を付けた。

少しだけ古い感じの佇まいだが、外からも分かるほどの広い庭がついている。エクステリアもキレイに整えられている、大きな家だ。

私がインターホンの呼び出しボタンを押すと、間もなくその家の住人が出た。

訪問販売に訪れたことを伝えると、その住人は快く中に迎え入れてくれた。

住人は四十歳くらいのジャージ姿の男性だ。だいぶダボツとした風貌だが、エリートも自宅にいるときはこういうものなのかもしれない。

彼に冷たい麦茶を用意してもらい、私たちはテーブルに向かい合って座った。

「ありがとうございます。それにしても素敵なお宅ですね」

「ええ、私もいい家だと思ってますよ。それで今日は何をお売りに？」

「こういった素敵なお家には、こんな照明などもお似合いかと……この掃除機があれば、広